

浄土

1983-2

昭和十年五月二十日 (第三種郵便物認可) 毎月一回、一日発行
昭和二十四年四月二十八日 運輸省 (新聞紙外、新聞紙外) 第二、三、五号
昭和五十八年一月二十五日印刷 昭和五十八年二月一日発行
第四十九卷 二月号



— 274 —

K. Oishi

岸信宏監修／藤堂恭俊・戸松啓真編

定本 **法然上人全集** 既刊一・七巻
各二、五〇〇円

坂本善隆編

B5判／全四巻／揃価六〇、〇〇〇円

浄土宗大辞典

藤吉慈海著

B6判／上下二巻／揃価二、八〇〇円

法然上人御法語講話

山 喜 房

東京都文京区本郷 5-28-4
☎03(811)5361 東京0-1900

人を知る

法然上人ものがたり

いちようの木はのびる

高橋良和著／A5判変形／上製／定価九〇〇円

教えを知る

浄土への道

法然上人法語抄

大室了暗著／文庫本サイズ／並製／定価一、〇〇〇円

東洋文化出版

東京都千代田区三崎町2-14-6
☎03(234)0321 東京3-89241

好評増刷／一セット二一、六〇〇円／全12巻
各価一、八〇〇円／〒三〇〇円

仏教説話文学全集

中村元編／一セット三五、〇〇〇円／全10巻
各価三、五〇〇円／〒三〇〇円

現代仏教名著全集

坪井俊映著／定価九、五〇〇円／〒三五〇円

法然浄土教の研究

― 伝統と自証について ―

隆 文 館

東京都千代田区神田和泉1-9
☎03(861)9605 東京4-153102

長田芳一画／五雨みなこ文

絵本 **ほうねんさま**

B5変型／定価三〇〇円

右近れい子画／福嶋智誉編

絵本 **おじぞうさま**

B5判／七二頁／定価四〇〇円

仏教まんが・教育図書

多数刊行

大 道 社

東京都千代田区飯田橋1-11-6
☎03(262)5944 東京1-8247

二月号



十方より来生せんもの心悦清浄
にしてすでに我が国に到らば、
快樂安穩ならしめん。

——『無量寿経』歎仏頌

目次

法 話

- 手づくり人生……………小 俣 昌 雄……(2)
法然上人のおことばと私……………渋谷 賢 応……(6)

涅槃会法話

- いかに安らかに死ねるか?……………松 濤 弘 道……(10)

(一)(口)(法)(話)

- 他力の念仏と自力の念仏……………村 瀬 秀 雄……(16)

特 別 寄 稿

- ブッダガヤ大塔参拝記……………佐 賀 和 章……(18)

- エッセイ 昭和五十八年 元日 ……………木 下 隆 一……(24)

仏教図庫

- 二月、節分の鬼……………鷲 見 定 信……(28)

<読者のページ>

- 老いと終焉……………吉 田 勇之助……(34)
浄土句集……………一 田 牛 畝 選……(32)
念仏ひじり三国志 (105) ——法然をめぐる人々…寺 内 大 吉……(37)

表紙 大西耕三画

カット 大正大学美術部



手づくり人生

小 俣 昌 雄
お また しょう ゆう

(東京・戸越行慶寺住職)

二月は一年中で一番寒い季節ですが、この時期が私にとってなかなか大変な時になっています。それというのも私どもの寺の幼稚園では毎年二月に卒園製作の陶板を作るようになっていまして、その粘土の練りから焼成まで、その大部分の工程が私の仕事で、それも戸外での作業が多いからです。

信楽しがらきの土をよく練って、一定の大きさの板を作ること、こどもには出来ませんから、私を中心に大人たちが作るのですが、数がまとまると大変です。それぞれ自分の顔を線刻で画いた園児の作品に、素焼をしてから、釉ぐち掛けをするのはこどもたちにやらせるようにしています

が、その釉薬うわすりは私が作るのですから一仕事です。それでも仕上がりがなかなかの出来栄えになるのを見ると、疲れも忘れるというものです。

一月にはこども達の前でロクロを使って壺などを成型して見せるのですが、その後で一人一人に粘土を渡して、思い思いのものをつくらせみますと、はじめは扱いかねていたこども達も自然に粘土になじんで、思いがけぬ良いものをつくってくれます。

ゴム粘土との違いも判り、それが水にとけて泥水になったり、乾くとカチンカチンになる自然の性質も吞み込めて、それが焼き上がった時の変身ぶりに、こどもたちの

眼が輝きます。このこどもの眼をみるのがうれしくて、ハードスケジュールを承知しながら毎年陶板づくりをしているわけです。

○

私が焼きものをつくり始めて十年余になりますが、寺と幼稚園の仕事の合間をみてのことですし、先ず素質は無いとみてよく一向に上達しません。先生は柳元悦さんといって、現在高山市の郊外に窯を築いている新進から中堅に進みつつある専門家です。民芸運動の祖といわれる宗悦先生のお孫さんですから、やはり自然の姿を大切に、飾りのない作品をつくって居られます。

弟子は目下のところ私ひとりのようです。東京在住の時は毎週来ての個人教授でありましたが、今も上京の折には来て下さって、いろいろ指導頂いて居りますが、さぞ教え甲斐の無さを歎いていることでしょう。

ただ私としては、この作陶を通して、手仕事の楽しさを味わうことが出来たばかりでなく、更にいろいろと教えられるところが多くあって、本当に良かったと思っています。

先ず、製作にかかっている時は雑事から開放されて自分だけの世界に遊ぶことが出来、素心に還れることです。勿論、周囲の者がそういう私の時間をもたせてくれているからですが、時としてはそうもゆかず、本焼中に寺の用で呼ばれ窯の傍を離れたために、焼き損んずることもあります。これは仕方ありません。

また実際に手がけてみますと、土練りにしても意外に難しいことが判ってきました、それだけ他人様の作品をみる眼が自づから以前と違って来たことです。それまではどちらかといえば無責任な鑑賞の仕方をしてことに気がついて、それ以来その作者の苦心を汲み取るように見る心構えが出来て来たことで、これも私にとって大事な収穫です。

それに土や火は嘘をつきません。こちらが手をぬけばそれがそのまま結果に現われる因果の理のこわさに思い至ったのも、やはり尊い導きであると思っています。

昔から一掃除・二勤行・三学問と修行の心得が言われていますが、第一つ掃除一すじに仏道を得た釈尊の弟子がいるように、頭だけでいう抽象論と違って、実践から得る分別というものが如何に大切を知ったわけです。

○

何時でしたか、NHKの教育テレビで、大分市の竹細工の名手を訪ねて、その製作ぶりを紹介しているのを見たことがあります。その家の後を電車^{でんしゃ}が走りぬけ、前はトラックが往来するような町なかにある簡素な住居の一室に、初老の御夫婦が向き合うように坐っていらっしゃる。その前に一つの竹細工めいたものが置いてあります。籠らしい形をしているとはいっても、縦のヒゴが十分程、横にまわしたヒゴも同じくらいで、大体の形をきめたところです。

私には、どういう形に出来るのか想像もつきませんでした。勿論御本人には既に完成の姿が出来ているのでしよう。それをためつすがめつ眺めながら「まあーこれでよいやろうか。」と独り言のように呟くと、傍の奥さんが「そうですねー。」と合いづちをうつのです。そのようにして工程が進み、時々ひと休みしては眺めて、あれこれ思案しながら、一つ花籠を完成させてゆくのでした。

ずいぶん根気の要る仕事ですが、竹のいのちをいとおしみながら、より美しい姿に生かしてゆくこととする作者

の心が、テレビをみる者の胸に温かく広がってゆくのを憶えたものです。

思えば、私たちの人生も、結局はひとりひとりが思案しながら自分で育ててゆく「手づくり」の人生なのですから、もっともっと心して、日々を玩味しながら生きてゆかなくてはならないわけです。

○

最近の私たちの身のまわりには電化製品が溢れていて、その便利さは格別です。そのために、アナウンサーの鈴木健二さんの「気くばり」と申しましょうか、自分の心を働かせることの大切さを忘れかけている面なきにしもあらずです。こうした機械化の先端をゆくものにロボットがあります。随分広い分野に使われていますが、精密機械の複雑な組立てをする産業用ロボットは、今までの熟練工を不要にしたばかりでなく、雇用全体に大きく影響しつつあるとさえ言われています。

ところで、この万能に近い能力を約束されているロボットも、専門家の話によりますと「味」を味わい分けることは不可能に近いそうです。

俳優の宍戸錠さんが全国の旨いものを店を訪ねるテレビ番組があって、宍戸さんが料理を一箸口にしては一寸首をかしげて味わう風情はまた格別ですが、「味」というものは一流店だけのものではなくて、私たちの普段の食卓でも、わが家の手料理を囲んで、「これ、とてもおいしい」という言葉が、自然に交されて不思議はありません。

ですから「味わう」ということに人間である証しがあるといえるのです。勿論「味わう」ということは味覚だけに限らず、春の桜・秋の紅葉に心を遊ばせるのも、友情を温め合うのも、文学や芸術の世界を鑑賞するのも、毎日の生活そのものを玩味することも、皆そのはたらくであって、人なればこそ持つことの出来る人生の宝だと申せましょう。

奈良や京都で、修学旅行の生徒がノート片手にガイドさんの説明や掲示板をメモするのに一生懸命な姿を見受けますが、その程度の説明は本に書いてあるのですから、それよりも、写真ではつかめない実際の姿を、もっとよく観て味わってほしいと思います。

勿論、その道の専門家の様に観ることは出来ないにせ

よ、自分の眼で観、自分の心で自分なりに味わうことの努力は必要です。

○

私が焼きものづくりを通じて得たのも、たとえ手をとるように教えられても、結局は、自分の手でつくることです。ですから、自分の眼で確かめ、自分で味わいながら、製作の手を進める他ないということです。

信心も又同じ道理だと思えます。お念仏の法門は普く一切の人々のため開かれて居りますが、実際に回心してお念仏の生活に入るのは、それぞれその人の自発の心によるものであって、自分の心で直かに、み仏を拝し、自行としてお念仏の生活に入るのでなければならぬのです。

とかくマスメディアの氾濫に自分の眼でみるという生き方が押し流されそうですが、自分なりに主体性を持つて「手づくり」の人生を玩味しながら生きてゆきたいものです。



法然上人のおことばと私

渋谷賢庵

(茅野市心光寺住職)

私は今までに二度も大患を煩いました。一度は胃かい
ようで、いま一度は脳血栓でした。病を煩う前には、ま
だまだ私の人生は長いと思っていました。私がお念仏を
ありがたく思うことも、いつかはもともとと深くなる
だろう。今これを胸に落し、少しの疑念をさしはさむこ
とができなくとも、年をとれば自然に口に出てきて、自
然に唱えられる時がくると思っていたのです。

病が癒てさて元の体に近づき、またやや自分の仕事か
できるようになると、病する前と今ではものの考え方、
世を処す方法が違っているのに気づきました。いつ、突

然に死の世界に入るか全くわからないと言うことです。
何の前ぶれもなく、最後の時を迎えなければならぬが
その時がわからないと言うことです。今までずっと遠く
にあった死ということが、にわかに現実のものとして眼
前に現れたのです。

このように思ったとき、私はあるあせりと迷いとを感
じました。そして法然上人のおことばにかえって來たの
です。

法然上人のおことばの中に、私の最も心うつものとし
て、常に私の心を射てはなさないものは勅修御伝第二十

一にのべられている「つねに仰せられける御詞」がござ
います。私がこれを初めて知ったのは仏教専門学校のと
き、伝道の時間に、稲垣真我先生から「この中にあるお
ことばの中より、一つをとり出しておはなしをしてみ
よ」と言われて見たのが最初でした。その時にはどんな
ことを言っておられるのかわからずに、何んとかその一
つをとり、責を果したのを思い出します。それ以来、い
つも何かに困り、何かにゆきづまると、必ずこのことが
思い出され、その度毎に別の感慨がこみ上げて来ます。
それとともによくもまあこのおことばを、上人の言われ
たそのままの形で、今の私たちに残して下さった。八百
年を隔った今日において、上人のありし日と全くかわる
ことなく、語りかけ、さとして下さる上人のお心に感激
し、おしいただく思いでございます。今その中のいくつ
かを味わせていただきたいと思います。

「人の命は食事の時、むせて死する事もあるなり。南無
阿弥陀仏とかみて、南無阿弥陀仏とのみ入るべきなり」
このおことばを初めてお読みしたときには正直に言っ
て、あたり前のことを言っておられる。上人にしてこの
おことばと思ひそんなに心に留めませんでした。

しかしながら、二度も大患を煩ひ、その都度生死の境
をさまよった今、このおことばを改めて味わうとき、今
までのような安易な気持で、たやすくこれをながめてい
るわけにはまいりません。去年も、またその前の年も、
多くの方々をお浄土におくりました。それらの方々の中
には、全く自覚症状がなく家の者も知らないうちに死を
むかえると言う方々もございました。私の煩った病氣に
おいても、何んの前触れもなかったのです。或る日突然
におそって来て、死の淵に立たせるのです。

南無阿弥陀仏とかみて南無阿弥陀仏とのむことができ
ていれば、どんなに心にゆとりがあつたかはかり知れま
せん。

「念仏申すにはまたく別の様なし、ただ申せば極楽へむ
まると知りて、心をいたして申せばまいるなり」

このおことばも、ついぞ心にとどまることなく見すご
しておりました。ところがよくよくこれを拝読するとき、
その奥に深い意味があるのだと気づかせていただきました。
このように、何んのためらいもなく、「ただ申
せば極楽へむまると知りて、心のいたして申せばまいる
なり」と言っておられるのです。ここにはすべての理屈

も何もございませぬ。

「心をいたして申せばまいるなり」

ほんとうにその通りでございます。

「人の手より物を得んずるに、すでに得たらんといまだ得ざるといづれか勝るべき。源空はすでに得たる心地にて念仏は申すなり」

このおことは上人のお心を言っておられるので私のとうてい及ぶ所ではないのですが、どうしても「いまだ得ざる心地」において「得たる心地」になり得ない私を恥かしく思います。でも時には「すでに得たる心地」にひたることもございます。胃かいような時、ほんとうに極楽の門まで行ったのです。病を起し倒れてしまったそのときでした。こちらがわの暗い様子とはちがつて、向こうに明かるい光がさして来ます。そこにはやわらかい光が満ちていて楽しい音楽が聞えるのです。そこに行きたい。早く行きたいと思うのですが思うように足が運ばません。そうしてゐるうちにその情景は變つて現実になります。けれども私には、このことが現実として、はっきりと頭の中に浮びます。いつもあの時のような「心地」

で居られたら、どんなにすばらしいでしょう。ところが、すぐ「得ざる」心に戻ってしまっている私に気づくのです。このような事ではならない。たとえそれが現実でなくとも、心は常に楽しい世界にいたいと思うのです。が、この世の現実の生活が、ここに私を止まることを許しません。これは私がこの現実の世界にいるからなのである。この現実の世界にいると言うことをかなぐり捨て去れば、この境地に到る事ができると思うのですが、生きている生身のこの体にはそれはできない相談とっていました。ところが上人はそうは言っではいけないのです。

「煩惱のうすくあつきをもちへりみず、罪障の軽き重きをも沙汰せず、ただ口に南無阿弥陀仏と唱へて、声につきて決定往生のおもいをなすべし」

よくよく考えれば上人の身邊には、私どもが想像もつかないような法難がうずまいていたのです。南都北嶺の迫害、住蓮安楽の死刑そして上人ご自身の遺流宣下、その中にあって、世に対するいろいろの思いが、煩惱の姿に代えて、どんなにか上人のお心をなやました事でしょう。「煩惱のうすきあつきをもちへりみず、罪障の軽き

重きをも沙汰せず」と言われるこの煩惱、罪障の中に、上人が一生すごされて味わわれたであろうさまざまな生きた事象が、みな入っているのだと思うとき、それらをふまえて申す念仏は私どもの申す念仏よりもすぐれていると思われるのですが、上人はこれにはそのように答えられません。

「我はこれ烏帽子もきざる男なり。十惡の法然房、愚癡の法然房が念仏して往生せんと云ふなり。」

上人はご自身を少しも特別な人、私どもと違った世界におられるお方とは思っていなかった。それよりもむしろ十惡の法然房、愚癡の法然房として、我々と同様の位置に引き下げて考えておられたのです。そうして、私どもの想像もつかないような迫害の中にいて、しかもご自身の信念を微動だにもしてられないのです。むしろこのおことばは、ひらきなおって宣言している不退転の意気さを感じるのです。

上人においてこのようにはっきり、力強くおっしゃられると、私どももまた意を強ういたします。どんなに苦しい世であってもどんなに身にこたえる事があっても、上人がこのように言いはなっていられるのですから、私

もこれにあやかって強くならなければなりません。
「いけば念仏の功つもりしなば浄土へまいりなん。とてもかくても此身には思いわづらふ事ぞなきと思ひぬれば、死生共にわづらひなし」

このおことばは上人の達し得た自内省の吐露だと思います。こんなに旋律的なおことばでご自身の自内省を吐露されるとは、何んと尊い事でございましょう。そこには少しの後悔も、まして自省もない。ほんとうに力一ぱい生きるだけ生き、なすべき事をなし、教団を完成せられた安らぎがあります。その上、私どもが常に恐れおののく死をもわづらいなく楽しいこととして受けとめておられるのです。

私は今更ながらこの浄土のお宗旨に生れた自分を感謝し、その中に生かされていることを楽しく思います。それは法然上人のおことばに接することができると言うこととです。そしてこれらのおことばを、記録に止めておかれた多くの先輩の諸上人に、ほんとうに感激して、ありがとうと頭を垂れずにはいられません。これからもこれらのおことばに、もっともっと多くのことを学びたいと思うのでございます。

涅槃會法話

いかに安らかに死ねるか？

松^{まつ} 濤^{なみ} 弘^{こう} 道^{どう}

(上野学園短大教授)

ふつう、人間の死を判定するには、(一)呼吸が止まり、(二)心臓が止まり、(三)瞳孔が開いたままになる、と医師はその人間が「死んだ」と宣告するようである。現代の医療技術をもってすれば、心臓マッサージなどの蘇生術で呼吸を長びかせることができる、痛みもとめられて、ある程度生きのびられるという。しかしそうした人間がいつまでも長生きしてもらったほうがいいのか、適当なところで安楽死してもらったほうがいいのか、高齢化社

会になればなるほどこうした問題に悩むことになる。本人の意志や家族の状況にもよろうが、今後、死の判定や操作をめぐっていろいろなトラブルが出てくることは火を見るより明らかで、すでにアメリカなどでは、生前中に死亡後の問題を残さないために公正証書を作っておく人もいるという。ホスピスといって治療不可能と考えられる患者を安心して死なせるために世話する設備もつくられている。しかし、わが国では意識もはっきり

している患者を他の一般患者と引き離してホスピスに隔離したとしたら、その患者はおそらく「いやだ／＼」と猛然と反撥するにちがいない。

従来、多くの患者は家庭や病院で近親者に見とられて、万一死んだ暁には先祖のいるところへ旅立つのだという漠然とした考えをもって息を引きとっていったと思う。ところが最近ではそうした近親者もそばにせず、一人淋しく、せいぜい看護婦さんという他人の前でもがきにもがいて死んでゆく人が多いようだ。まだキリスト教的影響の残っている欧米社会では、神父や牧師を臨終の場所に招き入れて、天国へ召天することを約束され、安心して息をひきとる例があるが、わが国でもし病院や家庭で臨終の場に僧侶が出向いたならば「縁起が悪い」と塩でもまかれるのがオチであろう。僧侶といえは今までの歴史的な行きがかりから、臨終後によく成仏できるように葬儀や法事をしてもらう人だ、くらいしか考えておらず、生前中によく生き、よく死ぬるようにはげましとなく、さめを与えてくれる宗教家という認識がうすい。

したがって、いくら僧侶が死に目にあって苦しんでいる患者を見舞い、そうした宗教的行為をしてあげたくても門前払いをくらってしまった。これではほんとうにもったいない話だ。

患者やその家族をはじめとして私たちにあって、死はいずれ確実に訪れるのであるから、その死を素直に受け入れるためにも、前もってもっと積極的に「死にのぞんでどうすべきか」について僧侶に教えを乞うべきであろう。もしそれができないならば、せめて「どうしたならば安心して生きられ、死ぬるか」を日頃から考え、いつどんな目にあってもけつしてたじろがないだけの覚悟をしておく必要がある。

では、いったい私たちが死ぬとはどういうことなのだろうか。

死とは一般的に息が止まって再び呼吸ができない状態を指し、今まで出会ってきた人たちと再会し、言葉を交わすこともできない永遠の別れでもある。それは考えただけでもおそろしく、つらいことにちがいない。

いくら日頃修養をつみ、信仰をもっていたとしても、それでもって肉体的な痛みが消えるわけではなく、その痛さに耐えかねてのたうちまわり、わめき散らすこともあろう。江戸時代の聖僧といわれた良寛さんでも、晩年に病魔におそれ、臨終間際にあまりの痛さに耐えかねてうめいていたらしい。それを見るに、見かねて長年連れ添っていた貞心尼が「あなたのような修業をつまれた方でも苦しむもののですか」と訊ねると、良寛は苦しい息の下から「裏を見せ 表を見せて 散るもよい」という辞世の句を語って息をひきとったという。肉体的苦痛という生理現象はどんな人にも避けられないものである。

どんなことをしても、いつかは死が確実にやってくる。気が転倒しているときにくるかもしれないし、確かなときにくるかもしれないが、それはほんの一瞬間の出来事である。それが過ぎれば呼吸器や細胞の活動は停止して肉体は硬直し、しばらくたってその腐敗がはじまる。これはどんなえらい人であろうとなかろうと人間の死には変わり

なく、こうなった以上は本人に意識がないから、痛みもおそれる何もないはずだ。むしろその死をいたみ悲しむのは、あとに残された人たちである。私たちも実は毎晩死んでいるのである。というのは、夜、眠りについているときは意識がなく、仮死状態にあるからだ。ただ、ほんとうの死と異なる点は、私たちは翌朝眼がさめると思っているから安心して寝られるだけのちがいである。

では、いったい死後の世界があるのだろうか。あるとすればどのような世界なのか。誰もあの世からこの世に戻ってきた人がいない以上、想像の域を出ないが、今まで東西を今の宗教家や思想家が論議してきたところである。それらを要約すれば、まず第一には、死後の世界はないという主張である。靈魂の存在は科学的にも証明不可能であり、そもそもないのであるから、肉体が減じて元素に分解されてしまえばそれがすべての終りであるという。第二には、天国とか極楽とか、輪廻転生の死後の世界が続くという主張である。死んだ暁には何もなくなってしまうとは到底信じられず、

何物かがどこかに残るはずであり、また残ってほしいという。

これらのいずれを信じようとも個人の自由であるが、要はいかにしたら私たち自身が安らかに死ねるにかかっている。十返舎一九の狂歌に、

今までは人のことだと思うだに

俺が死ぬとはこいつあたまたぬ

とうたわれているが、死が他人事ならいくらでも論議のしようがあるが、自分が死に目にあつたら誰しも愕然とするにちがいない。

「人生の喜びはそれを期待するところにある」という言葉があるが、同様に「死の恐怖はそれを期待するところにある」といえよう。デカルトも「病氣はあくまで科学的に治療すべきであるが、しかし、科学的に不治とわかったときは、いかに安心して死んでゆけるかに努力しなければならぬ」と述べている。もし、私たちが死を恐怖しなければ、死はひとつも恐ろしくないというのであ

る。

原始仏教經典中の『スッタニパータ』にも「世の中でかれこれの状態を究め明らかに、世の中で何ものにも動揺することなく、安らぎに帰し、苦悩なく、望むことのない人——かれは生と老衰とを越えたのである」といい、生死にかかわる欲望から超越すべきことを説いている。

肉体的な苦痛はあくまでも医学的治療にまたなければならぬが、生死にかかわる欲望という精神的苦痛にとらわれない生き方がどうしたならば実践可能であろうか。ここではじめて念仏の教えが登場するのである。

私たちは二つのことを同時に考えることができる。そのことを念頭において専念していると他を忘れる。同じ論法で、私たちが死に直面したときは、それ以外のことに専念することによって死を忘れ、死の恐怖をも乗り越えることができるはずである。中国やわが国の浄土教の先師たちが、現実に死に際で悩み苦しんでいる人たちがいかにしたら救

われるかを模索し、たどりついた結論が「臨終正念」という念仏行であった。『阿弥陀経』にはすでに「舍利弗よ、もし心がけのよい人が阿弥陀仏の名を聞いて、もしくは一日、もしくは二日、もしくは三日、もしくは四日、もしくは五日、もしくは六日、もしくは七日にわたって一心不乱に念仏するならば、その人の命終るときに阿弥陀仏は現われ、心が顛倒することなくやすらかに死に、ただちに阿弥陀仏の世界に生まれかわることができる」と記されている。

要するに「南無阿弥陀仏」をくり返し唱えていれば心身共にそれに専念して他を忘れ、安らかな気持ちで生死を超越することができるというのである。

わが国の法然上人はこうした考えを唱名念仏の一行に集約され、「生けらば念仏の功積り、死なば浄土に参りなん。とてもかくてもこの身に思いわずらうことなきと思ひぬれば、死生ともにわずらいなし」と確信をもって語っておられる。福井県鯖江市に住んでおられる竹部勝之進さんという

念仏信者も「フッテヨシ、ハレテヨシ、ナクテヨシ、アッテヨシ、シンデヨシ、イキテヨシ」と自然法爾の境地をよんでいる。私たちにとって、も生きている間も死ぬ間際も、いつでもどこでもまず一心に念仏することで、あとはおまかせするより仕方あるまい。

『浄土』臨時増刊号

——前進座『法然』上演記念号——

A5判 五二頁

一部定価 二〇〇円 丁料五〇円

(百部以上 一八〇円 丁料共)

◎はるかに法然上人のお人なりを、前進座が中村梅之助丈の熱演で舞台化した、その内容を、臨時増刊号としてまとめあげました。

田島栄台本を一挙に掲載し、諸先生の解説や随想を織り込んだ必読の好書。

◎『浄土』表紙版画絵販売についての案内

『浄土』誌の遅配が続いており、まことに申し訳ありません。

どうか今後ともまた、『浄土』誌の充実のために、会員諸兄の皆さまの暖かいご支援とご高配を心よりお願い申し上げます。

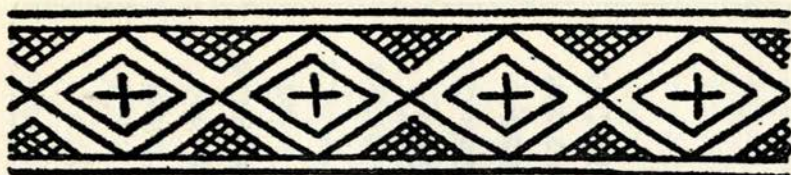
好評の『浄土』誌表紙版画絵は、大西耕三先生のご好意を得て、豪華額縁に装丁して販売させていただいております。額縁代も含めて、金二五〇〇〇円というお求めやすいお値段で、季節観に溢れた芸術味豊かな版画掛物が購入できるわけです。どうぞ振替にてご注文願えば幸いです。

また、大きさの方は、『浄土』表紙絵よりはずっと大きく、約20cm×30cm位の大きさですが、額縁の大きさでいえば30cm×50cm程の大変豪華な一幅となります。

なお限定販売のため、予定数に達しましたら、申し訳ありませんが、おことわりさせていただきます。しかし現在のところ、昨年度分、正月号から十二月号までの在庫も充分にありますので、ふるってご注文願えば幸いです。

(申し込み先) 〒102 東京都千代田区飯田橋一―二―六

法然上人鑽仰会 振替(東京) 八―八二―八七



(一) (口) (法) (話)

他力の念仏と自力の念仏

むら せ ひで お
村 瀬 秀 雄

仏教には八万四千にのぼる法門があるといわれているが、これを大きく分ければ聖道門と浄土門の二つしかないのである。聖道門は聖人賢者が困難な修行を積み重ねてゆく自力の法門であり、浄土門は凡夫が阿弥陀仏に助け給えと願って念仏を相續してゆく他力の法門である。法然上人は凡夫とは煩惱を断ち切ることができず、いつも心が散乱している者のことであるが、自分もまた凡夫に過ぎないとして次のように仰せられている。

「自分は烏帽子をつけない無位無官の僧である。十惡を犯す法然房、知恵のない法然房はただ念仏を唱えて、極樂往生したいと願っているだけである」

上人の足元にも及ばないわれ等は凡夫の下の下であることを痛感し、ますます阿弥陀仏に助けを求めて念仏を唱えているしか手立がないわけである。宋代の学僧の大智律師は自らを嘆いていっている。

「この身は久しく苦海に沈み、生死の世界を漂い歩き、いまだに寄る辺のない孤独さを託っている。例えば深い穴底に落ちた幼い子供が、大声をあげて泣き叫びながら父母の助けを待っているようなものである」

幼い子供がいくら泣き叫んでも、父母が聞きつけて助

けに来てくれないければ穴から出られない。子供が助かるのは泣く声の多少ではなくて、父母の助けという他力によってである。もしこれが屈強な若者であったならば、大声で叫ぶことをやめ、渾身の力を絞り絞って穴から這い出す工夫をするであらう。そして穴から出られたとすれば、それは若者の自力によってである。穴から出るのにも他力と自力があるように、念仏にもまた自力の念仏と他力の念仏がある。法然上人は次のように仰せられている。

「凡そ念仏といっても他力の念仏があり、自力の念仏がある。他力の念仏を唱える者は必ず極楽往生できるが、自力の念仏は初めから仏を頼る志がなくて唱えているのであるから全く往生できない」

他力の念仏を唱えていれば、臨終に來迎し給う阿弥陀仏に従って往生できるが、自力の念仏を唱えていても仏の來迎をこうむることがない。他力の念仏と自力の念仏とはまったく異質の行であって、念仏を唱える者の素質や環境とに関係がなく、唱える者の努力や念仏の数に関わる問題ではない。他力の念仏をいかに努力して多く唱えても、それはやはり他力の念仏である。このことを上

人は念仏行者に与えた文の中で、次のように仰せられている。

「僅か一遍か二遍の念仏を唱えるにしても、自力で往生できると考えて唱えるならば、それは自力の念仏である。毎日千遍万遍の念仏を唱え、百日千日夜夜を分たずに励み努めたにしても、偏えに仏の本願を頼みにして他力を仰いでいる人の念仏は、その一声一声が即ち他力の念仏なのである」

他力の念仏を唱えれば、阿弥陀仏の本願力に乗じてすみやかに往生できるが、その本願力に乗ずることができるといふ様相について、上人は次のように仰せられている。

「罪をつくった場合に、このような罪をつくったのでは必ず地獄におちるに相違ないのであるが、幸いにして本願の念仏を唱えれば必ず極楽往生ができるという嬉しさに喜ぶ時に、仏の本願力に乗ずることができる」

このように犯した罪の軽い重いによって卑下することなく、修行に努力する心が強い弱いを問題としないのである。ただ仏の本願を頼みにして、少しでも多くの念仏を唱えることが他力の念仏である。

特

別

寄

稿

ブツダガヤ大塔参拝記



佐賀和章 さがわしょう

(東京・芝法音寺住職)

昭和五十八年正月二日、ブツダガヤの日本寺で夕食を終えた私に、

「大塔をお参りしませんか」

とセイロン僧のナレス師が声をかけてきた。

今回娘と姪を誘って久しぶりのインドに来ていた私は、昨年暮一度ブツダガヤに立ち寄り、ヒマラヤのご来光を仰ぎに行こうと一週間皆でネパール旅行を楽しみ、戻ってきたばかりであった。

「いいですね。でも少し冷えてきたみたいですからジャ

ンパーをとってきます。少し待ってて下さい」

セーター二枚にジャンパーを重ね着した私は、一キロちょっと離れた大塔へナレス師と歩き出した。今年の冬は例年になく寒いという。彼も三衣の下に厚手のセーター、そして毛糸の帽子をかぶっている。

「今日は疲れましたでしよう」

こぼれるような星空を見上げながら歩く私に彼が話しかける。私と娘達は今朝バトナを出て、ナーランダ、ラージギールを参拝しながら車でゆられてきた。

「ええ少し、でも子供達と三蔵法師のご苦勞談なんかの話になりまして、今の自分達は快適で豪華なものだなどと結構ハシヤイでいましたから」

私の答えに日本語を解するナレス師は笑っている。

午後七時半すぎであった。今宵のブージャもすつかり終ったとみえ大塔は実に静かである。今日最後の右繞参拝なのだろうか、チベット人が数人ジュズをくくって歩く姿だけである。



—ブツダガヤの大塔—

私と彼は大塔堂内で心経一卷をあげると、裏手の菩提樹下に進んだ。誘われるままにサクに囲まれた菩提樹と金剛宝座の一面の中に入ると、彼はもってきた線香に火をつけ、私に差し出し、

「舍利礼文をゆっくり読んで下さい」

という。三衣の下からメモ用紙をとり出し、ここに書いてあるので私も唱和しますという。

そういえば彼は心経をしつかり呉音読みしていた。日本寺で座禅を勉強している彼は、日本僧がよく読む舍利礼文をマスターしようとしているのであろう。

二人でゆっくり三度復唱してから、彼がしたように私も菩提樹の幹にヒタイをあてて、その場から歩み出した。

大塔の北側にはいくつもの蓮台が上下二列になって並べられている。

「この蓮台は何を意味するのです」

私がつねる。

「釈尊は成道されてから三週間目、静かにここをお歩きになったからです。その時釈尊は十九歩前に歩き、また十九歩戻って往復したといわれます。そしてそのお足元

一步一步から蓮の花がひらいたとも。そのことにならうて仏教徒達は十九弁の蓮台を置いたのです。」

「すると上の箱状になった蓮台と下の列で往復したことを表わしているのですか」

とっさに私も愚かな質問と思ったが、すでに声に出していた。彼は微笑みながら、

「いや、箱状になっているのは最も古い蓮台を、崩れることをおそれてカバーしてしまったからです。仏教徒は多くこの地に蓮台を置いて参拝したといわれますが、現在復元出来たものはこれだけです。カバーされている中の蓮台はアショーカ王の献納といわれていますが、私も見ておりません」

「昨年私もスリランカを訪れ、キャンデーに向う途中で、岩山の寺に寄りましたら、きれいな白砂をひきつめた上を静かに歩む僧をみかけましたが、そのこともこの故事によるのですか」

「そうです。瞑想は座禅だけでなく、呼吸を整え静かに歩む形も重要なことなのです。釈尊は、ご自分の悟られた法を人に説くべきかどうか。人に説くには難解なこの法をどのように説くべきか考えつづけられながらここを

歩まれました」

「梵天勧請もこのときのことだったのでしょうか。よく解りました。ところで私も菩提樹下で釈尊は七日間、つまり一週間法悦にひたっておられたと学びましたが、それでは二週間目、釈尊はどちらに坐わられていたのですか」

「釈尊は夕日を拝まれていました」

「えっ、夕日ですか」

一瞬、びっくりして思わず声がうわづった私をみつめて、彼は静かに話しをつづけた。

「あなたは浄土セクトの方ですから、それはあなたにとって重要な場所です。ごらんなさい、あちらに白い小堂が見えます。あの位置です」

私たちは歩み出した。彼の話しはつづく。

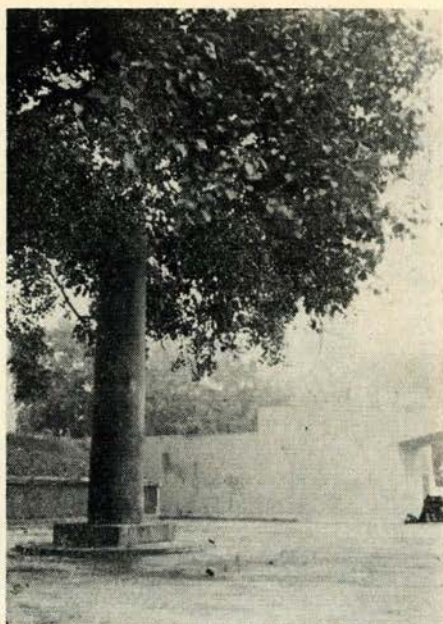
「七日間法悦にひたった釈尊は、立ち上ると今度は菩提樹と対峙する位置に一週間とどまりました。それは成道の悦びとそれを支えてくれたかの菩提樹への深々の感謝のためでした。そしてまたそこでは、朝の太陽の黎光が法悦を与えたように、沈みゆく大きな赤い太陽は一瞬菩提樹の葉一枚一枚をキラキラ輝かせ、石コロまでが輝き

にみちあふれ、釈尊に明日への大いなる希望を与えたのです」

「野辺の大地の石片までがですか。七宝合成の輝きをみせたのですね」

釈尊は浄土を見られていた。そしてそれは人として、生きとし生けるものすべてにとって、最上の輝ける世界であったにちがいない。

興奮気味の私は、そのお堂にたどりつくと坐りこんで



—蓮台—

しまった。五度目の大塔参拝で私は始めて識ったことであった。初めの二度は知人達との団体旅行だった。その時は大塔にもわずか一、二時間の参拝であった。しかし初めて訪れたときの感動は、今もはっきり心にきざまれている。あとの二度は、それぞれ一月、十日と毎日朝夕参拝させていただいた。しかしかの菩提樹のもとに建つ大塔という認識だけであり、この塔をとり囲む小堂一つ一つについての意味をくわしく理解しているわけではなかった。

「私も、釈尊はサルナートに立たれる前のひと月位をこの地にとどまっていたと聞いておりましたが、かの菩提樹を中心に、それぞれに移った位置まで知りませんでした」

「釈尊はここに七七、四十九日、七週間とどまられたのですよ」

私の無知にもかかわらず、ニコニコほえみながらナレス師は親切に説明をつづけてくれる。

「四週間目に坐られたところは、私ども仏教徒にとって最も重要な所です」

「それはどうですか」

「それではそこでお話ししましょう。どうぞお立ち下さい」

坐りつづけていた私をうながし、あの蓮台のそばを通り抜け、今度は北側の小さなお堂にたどりついた。

「釈尊はここに坐せられていたとき、まさに釈尊に後光がさされたのです。仏陀釈尊の誕生です」

「その時の釈尊を拝みかけた」

おもわず私は低い声を発した。

「私も同じ想いですよ。五週間目に釈尊はまたその居をさきほどの小堂の近く、パニアンパニアンの木の下に移しておられます」

私達はまた歩み出し、今の道に戻った。

そこは大塔正面前に位置する大鐘のすぐ前のところであつた。

「今はパニアンパニアンの木はなくなっております。後の仏教徒はその記念に、このピラーピラーを建てました」

パニアンパニアンの木の位置を示すピラーピラーをさすりながら彼は語ってくれる。よく見るとなるほどその柱には木の紋様が刻されている。

「六週間目は南の池から出たところ、すなわちアシーヨアシーヨ

カ王柱が建てられている位置です」

私達はその位置まで進む。

「ここに座られておられたとき雨になりました。その時池より大蛇があらわれ、釈尊の全身にまきついたと言われます。しかし、仏陀釈尊はその恐怖に打ち勝つたのです。アショーカ大王はその王柱をまさにこの位置に建立されました」

彼は静かに、ゆっくりと説明をつづける。

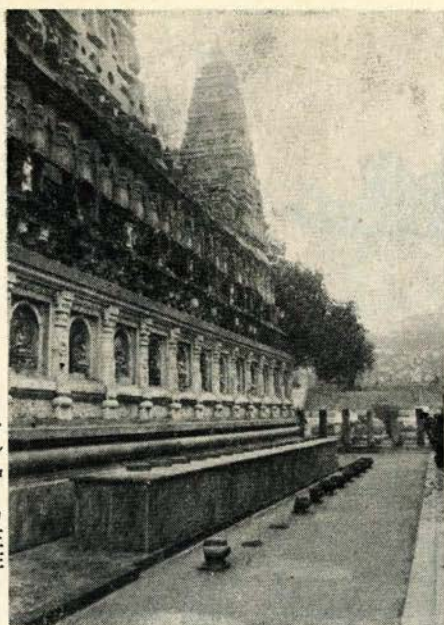
「七週間目、釈尊はここより菩提樹に近い前より座を移され瞑想しておりました。そこにビルマからの商人、タバスとバルッカの兄弟が通りかかり施をほどこしました。釈尊はその時二人に問いかけました。すなわち、なぜ私に施を与えるのかと。二人の商人は、あなたの姿は美しい、あなたは成覚者に違いないからですと。釈尊は二人に頭髮を切つて差し出しました。彼等はこれをありがたくおしただき、母国に戻るとこの頭髮を祀るべく寺を建立しました。ラングーンラングーンのシュータゴンバゴダシュータゴンバゴダです。釈尊は、その法を二人には説かなかつたけれども、仏陀釈尊はじめて施をほどこしたのは、この二人でした。この位置には代々ビルマから持ってきた樹を記念植

樹しております。現在のものは九年前に植えられたものです」

「法を説かなくても施を受けられるという自信が釈尊をして法を説く決意になったのでしょうか」

「私にも解かりません。ただこのことを契機に釈尊をしてサルナートに立とうというお考えになっているのはたしかでしょう」

「サルナートまで二五〇キロの道のりですね」



— アシローカ王柱 —

「遠くもあり、近くでもあったのでしょうか」

ナレス師も私に問いかけてきた。私達は顔を見合って笑った。

「今もチベットの人々はブッダガヤの参拝がおわると五体投地をくり返しながらサルナートへ向う人が多いですよ」

「私も道路をそのようにして進む方を見かけたことがあります。車、汽車とこの文明時代に本当に頭が下がりますね」

「ええ、何でしたっけ。ああ野辺の大地の石コロを目印にもってね」

私の心はまさに踊躍^{やうくわんぎ}歡喜^{かんぎ}していた。それが自分ではつきり分った。

大いに釈尊を偲^{おも}ばせていただきながら、私達は大塔をあとにした。今日の最後の参拝者となってしまった私達が、正門から出ると、管理人がそのトビラにカギをかけた。九層五十二メートルの大塔は、そのとき、ライトをすべて消され、闇の中に遅しく、黒々と聳^{そび}えたっていた。

エ
ッ
セ
イ

昭和五十八年 元日

——伊豆高原徒然草より——



日溜りの道を、仔犬を連れて歩いて行くと、
道端の思いがけないところから、キジバトが
翔び立って行ったりする。そのときどき、仔
犬は身構えて、鳥に注目し、鎖を鳴らしたり
もするが、やがて、すべてを忘れ去ってしま

木の^{きの}下^{した}隆^{りゅう}一^{いち}

(随筆家)

って、下萌した草をフンフン嗅ぎながら、あ
つちへチヨロチヨロ、こつちへチヨロチヨ
ロ、他愛ないと言えばそれまでだが、そんな
歩き方をするのであった。

天城山頂の雪も、相模の海も、午後の日射し

に映えて、ひかり輝いている。丘に立てば、もうそこまで春が来ていたのがわかる。風にしなう仔犬の耳にも、春の息吹が聞えているに違いない。タロ！ その黒い小さな鼻をあげて、春の匂いを嗅げ！

この詩を書いたのは、昭和五十三年、私が初めて伊豆高原で正月を迎えた時で、すべてが物珍しく、暇さえあれば仔犬を連れて歩き廻っていた。もう、あれから五年になる。

句日記を繰ってみると、松の内に雨が降ったのは、この年の元日と、五十五年の三日と五日だけで、あとはいずれも良い日和に恵まれている。天城に雪がある年もあれば、無い年もあった。去年も今年も、元日の天城には雪は無かった。暖冬の年末年始、好天が続いたせいである。所謂、冬らしい冬であれば、里に雨が降ると、山は雪になる。五十五年の正月がそれだった。小雨の中、町まで買物に行くと、山越えして来た初荷のトラックが、

幌の上に雪を積んで下って来るのに出会った。

「まるで、雪の初荷だね」

と言うと、

「天城の雪なのよねえ」

と、女房は感に堪えないように言った。

あれからでも三年——窓の外に拡がる、うす緑にけぶる雑木林を眺めていると、そんな思いが胸をよぎる。

「すっかり春の景色ね」

いつの間にか、横に立った女房が言った。

去年の秋、二度の台風にやられて葉を落した雑木が、秋の終りに一斉に芽を吹いた。陽気が春先と同じようだったので、植物の感覚を狂わせ、花の返り咲きに似た現象を起こしたのである。こういうのを、返り芽吹きとも呼ばいいのであるうか。それに平行して返り咲きした花も多かった。近くの農家の庭の枝垂桃は見事だった。枝という枝にびっしり花をつけていた。その家の主人は、「こん

なの初めてだ、春だってこんなに咲きやすいのに。来年咲くかねえ」と、半ば諦め顔でぼやいていた。だが、不思議に梅の返り花は目にしなかった。気温が梅の開花条件と合わなかったからであろう。まあ、それはともかく、この返り芽吹きが成長して、いま、うす緑の霞を引いているのである。

「このまま青葉になってしまふのかしら」

「まさか。二三次強霜に会ったら枯れてしまふさ」

「また芽吹く?」

「多分ね。多少は遅れたりするかも知れないけど。自然ってそれ程脆弱じゃない、したたかなものさ。でなきゃ、人間の何倍もの年数生き永らえることは出来ない」

「散歩でもしましょか」

気分を変えるように、女房が言った。

「うん、寒桜でも見に行くか」

歩いて三、四分のところに、五本の寒桜の老大樹が枝を拡げている。去年の正月見に行

った時は満開で、百羽近くのメジロが群れて花の蜜を吸っていた。

「今年も鳥たち来てるかしら」

「花がどうか? 秋大分咲いていたから。」

花が少ないと、鳥の寄りも悪いのでは……」私の危惧は当たった。老樹は乏しい花をつけているだけで、大方は散って道を白く染めていた。これなら秋の方がよく咲いていたと思った。

「ああ、いる、いる」

女房が指さした梢の枝に、数は少ないが、顔に特徴のあるメジロの姿があった。

「秋には一羽もいなかった。花があっても、メジロにとっては、まだ山をおりる気温ではなかったんだろう」

植物には植物の、動物には動物の適温というものがあることを私は思った。狭庭の水仙も、路傍も曼珠沙華も、例え遅速はあっても時が来れば芽を出し花を開くが、冷夏の年には、初冬のものとされている茶の花が、八月

半ばには早々と花を開いてしまうのである。その点動物の方が植物よりも温度差に対して適応性があるのか、冷たくなったからといって、慌てて山からおりて来たりはしない。

一朵の雲も無い空に、勢いよく一条の飛行機雲が伸びて行く。高度から見て国際線だと、その雲を見つめながら私はアメリカの娘を思った。思いは同じらしく、

「ひろみちゃん、どうしてるかしら」

そう言って、空を見上げる女房の顔は、時差の計算をしている顔であった。

「あとで電話してみろよ。向いは寒いらしいよ、今年はマイナス三十度(華氏)くらいじゃないかな?」

飛行機雲は、いつか天城を越えて、どこまでもどこまでも伸び続けていた。一路旅路の平安を祈る。

風が少し出て来た。

元日や天城山巔雪を見ず

(了)

村瀬 秀雄 著

|| 好評新刷 ||

『全訳 法然上人 勅修御伝』

B 6判 八四七頁 価六八〇〇円

|| 好評 ||

『和訳 浄土三部経』

B 6判 四七四頁 価二五〇〇円

『和訳 法然上人 撰 択集』

B 6判 三八七頁 価二五〇〇円

『和訳 善導大師 観経四帖疏』

B 6判 五八四頁 価三五〇〇円

『和訳 善導大師 六時礼讃』

B 6判 二六五頁 価二四〇〇円

取扱い 法然上人 讃仰会

(仏)(教)(行)(事)(一)(年)

二月、節分の鬼

追儼と豆撒き

驚見定信
わしみじょうしん

へもう一つの正月

暦のいたずら、という誤弊があるが、農民にとって春の到来は、農作業の開始を意味していたから、立春こそ年の始まりという感覚が強かった。暦がどう変わるかと農民の生活のリズムは、それを身体が覚えていた。事実、近年まで立春正月が営まれていた例はいくらでもあ

げることができる。

今では、正月は一月、節分は二月と別れたが、暦では近接していたから、時によって十二月のうちに春が来ることさえあった。正月も立春も重なりあっていた頃は新年が春の訪れでもあるという感覚にズレはなかった。しかし、正月と立春が離されてくるとバランスがくずれてくる。正月行事が節分・立春の行事に移されることもあれば、正月は年神様のまつり、節分・立春は豊作を願う予

祝のまつりと区分けされたりもする。くずれたバランスをどう取りもどすかは地域や階層によっても違いがでてくる。その結果同じような行事が一月にもあれば、二月（ときには三月）にも見られる事となった。そうした一つが節分である。もう一つの正月と呼べるだろう。

節分の行事は追儼（鬼はらい）と豆撒きが代表的である。しかし追儼はすでにみたように正月行事のものであった。それに対して豆撒きは民間に伝えられていた行事が節分の行事として、吸いあげられてきたものである。今では、この両者はともに「鬼を追う」という点では一致している。ただ、鬼を追うのに「大声」で行うか、「豆打」で行うかの違いだけのようないきさせられているがどうであろうか。

〈追儼の鬼〉

追儼は正月行事であった。平安時代の初めに中国より移入された晦日の行事である。禁中では黄金四目の仮面をかぶり、玄衣朱裳を着し、戈と盾をもった方相氏が大声（儼声）を発して三度戈で盾を打つのである。居並ぶ群

臣はこの音を合図にそれぞれ桃の弓と蓬^{よもぎ}の矢をふるって鬼を追う。この行事はやがて貴族達も行うようになる。

大声をあげ騒々しく鬼を追った様子は「徒然草」にみえている。「……追儼より四方拜につづくこそおもしろけれ、晦日の夜いたう暗きに松どもともして夜半すぐるまで、人の門たたき走りありき、何事にかあらん。ことごとしくのしりて、足を空にまどうが、暁方よりさすがに音なくなりぬこそ年のなごりも心ほそけれ」と。

兼好法師が耳にしたこの騒ぎが禁中から躍りでた方相氏の一行か、貴族達の追儼かは定かではないが年の終りに大声をあげ、ことさらに音をたて、灯明を振りまわして目にみえない悪鬼を追う人びとの姿をよくとらえている。大声、騒音による悪霊の駆除というモチーフは日本の場合だけではない。

アームチュニアの最後の人類学といわれたスコットランド出身のフレーザーは膨大な民族誌や神話・古典文学などのなかから「死と再生を象徴する季節祭を解釈して王殺しのテーマに挑んだ比較民族学的論究の書」（藤井正雄）である「金枝篇」において多くの事例をあげている。その一つをとりだしてみよう。一八八四年に黄金海

岸のケーブ・ユースト・キャッスルでの報告である。

「今夜悪霊アボンサムを町から放逐する年ごとの慣習的な行事が執り行われた。八時の砲が城砦から轟きわたるや否や人々は悪魔を威嚇するためにめいめいの家で鉄砲を発射したり、家具を残らず戸外へ投げだしたり、棒その他のでもって部屋の隅々まで叩きまわったり、できる限りの大声で叫んだりしはじめた。家からそれを追い出して（彼らはそう信じる）彼らは勢よく通りへ飛び出し、今度はそれを町から海へ追い出すために、火のついた炬火を投げたり、どなったり、叫んだり、棒を打ち合わせた、古鍋を叩いたりして、いとも怖ろしい物音を立てた……」とある。

大声、騒音が悪霊を追い出す、というモチーフはかなり普遍的であったといえよう。季節のかわり目にあつて過ぎ去った過去、古びた時間は穢れをとめないやすいから再生する必要があつた。しかし、時間は不可視である。人々は悪霊、悪鬼に仮託してこれを追うことによつて時間を蘇みかえらせたのである。

追儼の主役である方相氏がその異様な姿から後には方相氏そのものが鬼と目されるようになったのも当然の結

果かもしれない。

ここでの鬼はそのはじまりから悪であつた。古びた時間から生まれた、汚れた悪霊であつた。人びとはみえない鬼を方相氏の形をとつて具体化し、それを追うことによつて新たな時間を獲得したのである。

しかし修正（鬼）会、修二会に習合した追儼の鬼は負の価値しか持ち合わせていないとは思えない。愛敬のある鬼や悪を払う鬼の姿も残されているからである。

〈豆撒きの鬼〉

追儼と並んで節分の行事には豆まきが広く行われている。「福は内、鬼は外」という掛声とともに豆を打つという形はほぼ共通している。ここでも鬼は罪を背負つて逃げだすという不運な役割を演じている。しかし豆打の鬼は悪しきものではない。ここでの鬼は神霊なのである。

豆打が文献にあらわれるのはその当初から節分の行事としてである、と鈴木裳三氏は指摘する。そして鈴木氏は農村の予祝行事であつたものが武家、貴族にとりいれ

られて一般化したものだろうと推定している。これによれば鬼のもう一つの姿が垣間みえてくる。予祝行事は神を迎えて豊作を願ひ、神意をもとめて吉凶を占う行事が中心テーマである。神様は追い払うどころか丁寧に接待をしなければならぬ存在である。神様はきまつた形をとっては現れない。姿をみせないことも多い。よしんば現われても姿をかえてくる。仕方がないから常とはちがう人や異郷の人には注意深い心使いが必要となってくる。いつしか異様なものは神的なものとの共通認識もでてくる。恐しい形をしているから悪いものだと断定しない。いつだって神様はまともな形で顕われたことはないので驚くはずがないのである。鬼もその一つである。「泣いた赤鬼」という童話があるがその根底には鬼が悪しきものというだけではない民俗の深層意識にさざえられてゐるから共感できるのである。

鬼は祖霊であり、田の神でもあったといえようか。少なくとも人びとに幸福を授けるといふ役割ではある。いいかえれば春くる鬼は祝福をもたらす神霊であつた。とすれば、神に豆を打つはずはない。豆の役割は別にあつた。神への供物である。中村康隆師は、「豆撒きも、元

来、散銭、散米の風と同じ、散供であつたので、実は鬼を打つためではなく、訪れてくる神霊への散供であつたのである。それが邪気をはらう効能を信じられて鬼を打つ豆と転じたのである」(宗教学小論集)と教えている。

追儼には、「陰陽師系の鬼追いと仏寺に多い鬼踊り」(五来重)との系統の違いが指摘されている。前者は追われる鬼であり、後者は愛される鬼である。節分に社寺、民間で行われる行事のなかには、この二つの系統の鬼が混在しているのである。わかりやすいいえば、その起源からみて追儼の鬼は「追われる鬼」であり、豆撒きの鬼は「愛される鬼」とでもいいえよう。陰陽師系と固有信仰との出自の違いでもある。しかしいつしか私達は悪しきものとしてのみ鬼をみることに慣れきってしまった。それは鬼の側にも責任があるだろう。

鬼は曖昧な存在である。人間でもなければ神でもない。善でもあれば悪でもある。時とところで性格に違いがでてくる。修正(鬼)会や節分の鬼が一定の役割にとどまっていなひはその位置の曖昧さによるところにある。しかし、鬼だけの責任ではない、変化する暦のいたずらによるものでもある。

浄土句集

一田牛畝選

とならん。

老患者目細め小春楽しめる

福岡 原 敬二郎

評 老患者の病人も、身体快く小春の縁まで出て、日向ぼなどをしているのであろう。目を細めて気持ちがよさそうである。

忘れ傘仰ぐ小春の華頂山

福岡 林 澄山

評 知恩院に詣でて忘れ傘を仰いでいるのである。小春の東山は気持ちよく晴れ渡り、身も心も楽しかしことならん。

静かなる野菊に犬の嗅きて行く

福岡 安藤平次郎

城址は落葉に埋もれ鳩遊ぶ

三重 山田 うた

老の腰いたわりながら落葉はく

東京 栗原やえ子

評 年を取れば、身体のおちこちが痛くなる。散った葉はそのままにして置けぬ。掃くのは老人の仕事である。

肩かけてずれて詫びしき老の肩

東京 真野よし子

評 老の肩は落ちて姿も悪くなる。掛けた肩掛けも自然とずれるのである。誠に詫びしいことあるが仕方ないこと。

煙瓶を掲げて熱燭所望せり

福岡 荒牧 還愚

評 熱燭をくみ交している。爾汝の仲らしい。酒がなくなった。燭瓶を掲げて所望している。嚟ぞかし楽しい事ならん。

新世帯なれば大根少し干す

山形 松田 光誉

評 新世帯なれば、まだまだ二人らしい。沢庵の大根も二人分でよいのであるから、少しばかり干されている。嚟ぞかし二人の仲はむつまじいことならん。

法類の随喜賑やか十夜かな

大分 丹羽 難中

評 法類の多い寺は随喜僧も多く、参詣者も沢山で十夜衆の念仏の声も賑やかなこ

群馬 島津 か寿
小春日や自らなるお念仏

東京 満尾衣有子
枯菊になほ捨てやらぬ想あり

福岡 檀藤みきを
追善の涙新たに十夜諷誦

福岡 上滝津弥音
誕生日に傘贈られ老の幸

東京 小笠原香祥
冠木門くぐれば石路の花を目に

山梨 青山富貴江
柿つつく鳥の群れをり朝早く

山形 松田 允子
朱き実もくくられており冬構え

福岡 服部 光代
子を背なにかき坊守十夜寺

山口 三井 寛静
冬溝が法要終へし鳥に寄す

東京 新井 新生
シルバー席若い男女の冬溜り

福岡 荒牧 亀齡
三夫婦にひい孫三人老の春

山形 佐藤 緑石
人去りて闇の迫りし初時雨

東京 田中 秀代
祇王寺の竹の春見し京の旅

三重 森 静枝
童心にかえりて蟬をとってやる

山口 上野 明達
祖師誕生八五〇年秋法座

福岡 青柳 良巖
案内僧柔和に在す秋の寺

長野 友淵旋風子
しらじらと雪の降りをり夜明かな

福岡 深井 鉅土
木魚の音朝定刻に秋の堂

東京 吉田ゆきえ
久々の旅は初冬の吉備路かな

福岡 前田 秀峰
新法主迎え本山樟落葉

福岡 行正 明弘
十夜諷誦受け念仏も涙声

東京 末常てる子
冬の浜ぬくし美しく小石拾ふ

福岡 永江 隆説
やわらかな団扇の風を僧の背に
寒あけしこと喜こんで本山へ 一田 牛畝



老 い と 終 焉

よし
だ
ゆうのすけ
吉 田 勇之助

万物はみな変化し、常住なものは何一つないという此の「無常」が死と結びつけて考えられている。死は人が忌み嫌うもので、それを口にするこや、死という発音と同じものであれば、同工異曲というのか、その意味が異っていても不吉として避ける。

死というものは謎である。そして死後は全く不明の世界だ。生きている間は死はない。又生きていて死を経験することも不可能である。人はあまり死というものに目を向けたがらない。恐ろしい死というものの中

で一番恐ろしいのが自分の死である。

死刑執行に四回立ち会ったことがある刑務官の話（一九八二・五・二六・朝日新聞）を読むと、その死刑囚の苦悶がよくわかる。……最初は何かと助かろうと、あらゆることをする。それでも、死から逃れられないとわかると自暴自棄になったり、半狂乱になる。ところがそれを越えたと今度は悟りを開いたように急に柔和になり、たいていは読経しながら処刑される……とある。

何故、死はこわいのか。自分という存在が死によってなくされてしまうからだ。

自分は生きている、存在しているという意識があるからこそ自分というものを消し去ってしまう死が恐ろしいのだ。死は忌まわしく、恐ろしく、暗い世界であることが感知できる。寝たきりで他人の世話でやっと生き、心身に苦しみを受けている悲惨な老人でも「生」への願いをあっさりとは捨ててしまわない。恍惚の人、生命維持装置で生かされ続けている所謂、植物人間になってしまえば、死に対する恐怖感が出てこない。それは、考えること、行動する意識が無いからだ。

この頃のように老人の福祉問題が取り上げられてくると、死の問題を避けて通れなくなる。考人は環境に對する適応力も衰えてきているし、老い先には死がはつきり見えている。回復の見込みが全くない者が、危篤に陥った場合でも、日本の医師は静かに、安楽に死を迎えさせるような方法は採らない。長年ともり続けた生命の灯が今や消えようとし、そして帰りおもむく世界へ向かおうとしつつある者を無理に引き戻そうと

するのに似ている。

重症障害児の安楽死をみとめた判決が、アメリカにあったと聞いた。安楽死を肯定する気持がわかる。

しかし、自分が考えることや、行動することを意識しないからといって、人格分裂とかいうか、人格交代とかいうのか、なお又、ヒステリー神経症のような精神活動の場合もあるのだから、安楽死は中々むづかしい問題である。又、アメリカにあるような行きとどいた医療施設ホスピスのない現在の我が国では、割り切っては扱えない。

仏陀最後の旅が書かれている「大パリニッバーナー經」の釈尊ご臨終のおことばのところは、全く深い感銘を受ける。すばらしい終焉と安楽な臨終とは必ずしも一つになるものではない。

ご老体の釈尊がクシナラへ向って最後の旅を続けられた時、鍛冶師の子チュンダから受けられた供養のために、激しい腹痛のやまいにおちいられた。「もう、わたしは革ひもの助けによらねば動かない車のようになってしまった」と。ご自身の老耄をのべられた。

アーナンダによって設けられた沙羅雙樹の下の床に

横になられた。師が地上を去られることの近きを知って悲しみの極にあって言葉も出ぬ比丘たちに向って、釈尊は、「では、比丘たちよ、わたしが言おう。……此の世のことはすべて壊法である。放逸することなく精進するがよい……これがわたしの最後のことばである」それから眼をとじられ永遠の寂靜に入られた。釈尊には純粹の命（法）が輝いていたのであった。

老齡と配流によるご疲労で、ご入滅が近くなった頃の法然上人は、老衰が一段とひどくなられていた。念仏の声もお出しになれず、ただ念仏を称えようと口だけ動かしておられた。全身が念仏で、無限の彼方にあたる人間の歸り赴く世界へと靜かに向かれるお姿であった。

死の恐怖を乗り越え、克服しようとしてみてみるが、中々凡人の出来ることではない。既に齡八十二を越してしまっているので、ただ人に迷惑を及ぼすことのないよう、そして苦痛を覚えずして靜かに終りたいとのみ願っている。「往生」を念じながら。無双の學僧であられる上人の次の御詞が、深く心をとらえる。

「学生骨になりて、念仏や失はんずらん」

「我は……是非も知らざる無智の者也。只念仏往生を仰いで信ず」

◇“浄土句集”欄投稿要項

多くの方々のご投句をお待ちしております。大本山善導寺の新法主になりました一田先生も大変にはりきっておられますので、ふるって作句して下さい。

一 ハガキ一葉に四、五句づつお書き下さい
一 投稿先――

〒812 福岡市博多区中呉服町10-14

正定寺 一田牛畝先生宛

〒102 東京都千代田区飯田橋1-11-6

法然上人讃仰会



念佛ひじり三国志

(百五)

——法然をよめる人々——

寺内大吉

挿絵 松濤達文画



「法然伝」、「四十八巻伝」によると、安樂房遵西の
処刑は建永二年（二〇七）二月九日ということになって
いる。もっとも記載文を仔細に点検すると、必ずしも二
月九日が処刑日だったとは限らない。

翌年建永二年二月九日、住蓮安樂庭上ニ召サレテ、

罪科セラルルトキ、安樂、見有修行起瞋毒、方便
破壊競生怨、如此生盲闇提輩、毀滅頓教永沈淪、
超過大地微塵劫、未可得離三途身ノ文ヲ誦シケル
ニ、逆鱗イヨイヨサカリニシテ、官人秀能ニオホ
セテ、六条川原ニテ安房ヲ死罪ニオコナハルルト
キ、奉行ノ官人ニイトマヲコヒ、ヒトリ日没ノ礼
讃ヲ行ズルニ紫雲空ニミチケレバ、諸人怪シミ
ヲナストコロニ、安樂申シケルハ念仏數百遍ノ
チ十念ヲ唱ヘンヲ待チテ斬ルベシ。合掌乱レズシ
テ、右ニ伏サバ本意ヲ遂ゲスト知ルベシト言ヒテ、

高声念仏數百遍ノノチ、十念ミチケル時斬ラレケルニ、言ヒツルニタガハズ、合掌乱レズシテ右ニ伏シニケリ。見聞ノ諸人随喜ノ涙ヲ流シ、念仏ニ帰スル人多カリケリ

庭前に召されて罪科を申し渡され、安樂房は法事讃を誦した。これで後鳥羽院の逆鱗はいっそう激しいものになり、「新古今集」の歌友でもあり、防鴨河岸(ほうかし)判官でもあった官人秀能に六条河原で斬ることをお命じになった。

つまりこの庭前から六条川原の死刑執行までには幾ばくの日があつた、と考えるのが自然であらう。

現に藤原定家の「明月記」も二月九日には「近日、只一向専修ノ沙汰、搦メ取ラレ、拷問サルト云々。筆端ノ及ブ所ニアラズ」と書くだけである。処刑がおこなわれていたら、好奇心の強い定家のことだ。匂わせるような文章が書き添えられていい。

続く文章は「明日、任大臣、昇進ノ人々、悦喜ノ気色、形ニ現ハル。傍人ノ榮貴ニ対スル毎ニ、独り紅涙ヲ拭フ。只、剃髪セザルノ過怠ナリ。人ヲ恨ムベカラズ。

夜、河西ノ民家ニ移リ宿ス。寒風刀ノ如シ。病身ト憂心、終夜休マズ」と定家自身のことばかりを書いてゐる。

明日が昇進発表だ。だが定家は洩れている。ジェラシイのため紅涙にむせぶ。これも出家することを怠つたためであるか。

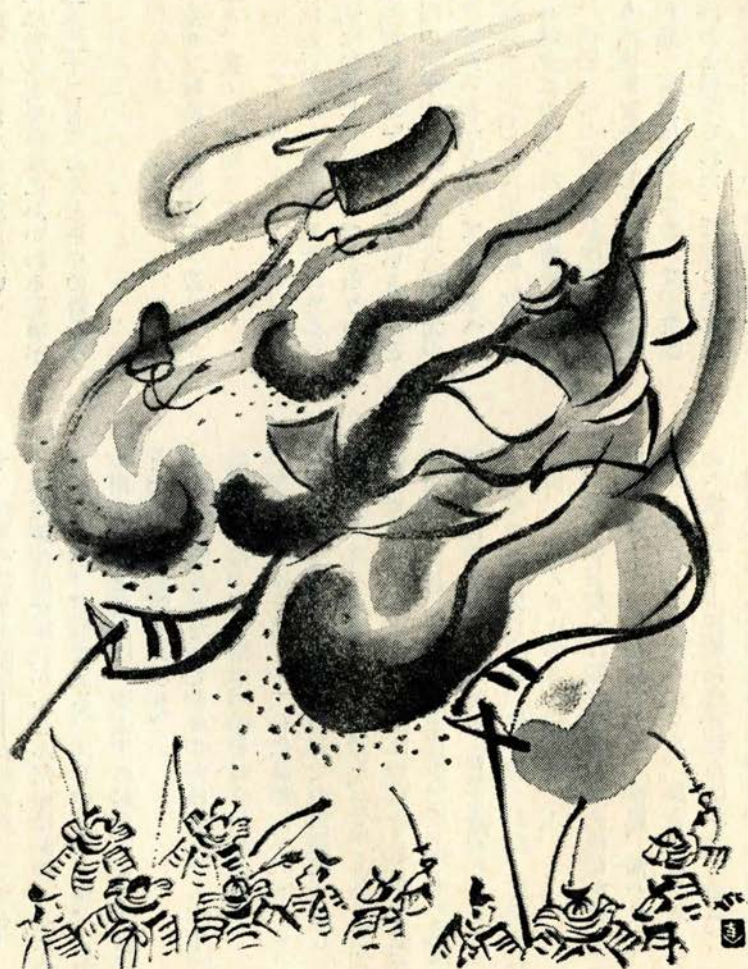
その「明日」に定家は興味深い三行を日記に書き添えた。

——十日、天晴ル。任大臣ト云々。(中略)今朝、兼時朝臣、入道殿ノ御使トナリテ参ズ。専修ノ僧ヲ相具スト云々。専ラ申サルベキ事ニアラザルカ。骨鯁ノ御本性、猶以テ此ノ如シ

安樂房たちが逮捕された翌日、九条兼実(かねみね)は院へ使者として修理大夫兼時(かねとき)を派した。専修(せんしゆ)ひじりを同行したという。骨鯁(こつこう)逞ましい(こつこう)本性は昔に変わらない、と定家は呆きれもし、敬服もする。

この記事を見ただけでも罪科の申渡しや刑の執行が、さらに日限をへだてていたことがわかる。

＜京都と鎌倉＞



その「専修ノ僧」が誰であつたかはわからない。

以後の「明月記」には殆んど専修者にかかわる記事がない。わずかに同じ二月二十二日でこんな洛中の噂をつたえる。

——天晴ル。夜部、京中又騒動。親能法師ノ辺リ、

軍兵群ヲ成スト云々。其ノ故ヲ知ラズ

「又、騒動」とあるには最近しばしば発生したにちがいない。安楽房たちの処刑に関連していたのであろうか。

「親能法師ノ辺リ、軍兵群ヲ成ス」とはどういうことか。親能法師は中原広季の息子である。弟に大江広元がいる。ただし広元は大江家から養子となつて中原家へ入籍したもので、建保四年（一二二六）には大江姓へ復した。すでに若いときから鎌倉にいて、武家政権中の法制家として重きをなした。親能もこの養弟を助けて京都における鎌倉の窓口のような役割を果たしてきた。

この中原家。広季―親能、広元は傍系であつて、主流は出羽守師元―師尚、師秀と継承された。師秀の妹は二条院の女房となつて簪子内親王の生母でもある。そし

て、師秀の次男が師広——安楽房遵西である。

中原親能邸を軍兵がかこんだのは保護するためか威嚇であつたか。不明である。同じ中原の一族、しかも鎌倉の出先機関とあれば、安楽房の処刑によって騒ぎの中心となるのは当然であらう。

騒動は三月になつてもおさまらない。「明月記」からの断片を拾つても洛中の様子がうかがえる。

後鳥羽院は三月二十二日に高野山へ行幸する。西面ノ武士たちをそっくり引きつれての出発だったらしい。その翌晩「坤ニ火有り、四条壬生、五条ニ及ブ」（「明月記」）怪火であつた。三十日に院は帰洛するが寵臣三浦秀康（官人秀能の兄）と左兵衛佐仲兼の部下同士が武闘を演ずる。「仲兼京ヲ出ズ。父卿（仲経中納言）永ク見ニ来タルベカラザルノ由ヲ示ス。件ノ侍、新参。両三日召シ仕フノ由、一門ノ人々称ス」（「明月記」）。

同じ「明月記」は四月二日、尊長僧都を諷してこんな評言を書く。「顯密共ニ欠ク。戒律、備ハラズ。只縁者ノ体ヲ傲ヒ近臣ノ列ニ加ワル。墨染ノ袴ヲ着シテ白砂ノ上ニ候ス」——奸物だと言わんばかりである。

四月五日、九条兼実が死ぬ。その日の亥の刻、南方に

火災発生。五条坊門室町、三条殿南町、三方に火はひろがり、六角堂も灰燼に帰したという。

そんなさなかに後鳥羽院は側近歌人を集めて竟宴にふけり、西面ノ武士たちの競べ馬を楽しんでいたようである。

前にふれたが、後鳥羽院の高野山行幸。これも小叛乱があつたためだ。紀州の暴民が高野山に乱入し、狩猟を企て寺領を押妨したという。京からの訴状を受け「かの国、院の御熊野詣の駅家の雑事として、自今以後させる事なきのほか、守護人置くべからず。これに就きて諸事仙洞のお計ひたるべきの由、これを定めらる。よつて義連が代、早く召し上ぐべきの由、御書を掃部入道寂忍（中原親能）がもとに遣はさるるところなり。広元朝臣これを奉行す」（「吾妻鏡」）となる。

つまりこの暴臣は守護職佐原義連の部下たちがやつた組織的な叛乱、というのである。その義連はすでに故人となつてゐる。だから以後は代官を置かず、朝廷がじかに管理したらしい、と答申してゐる。更に言えば、後鳥羽院の熊野参詣、駅路の治安はそちらで守つて下さい、と突き放したようなものである。

断片的な記載であつて、到底事件の真相には迫り得ない。わずかに背景を彩どる風色にとどまる。

二一

馬淵の里に近い荒れ寺で一夜を明かした住蓮は、翌日ひそかに京へ連れ去られる。佐々木弥太郎判官ら騎馬武者に囲まれて、住蓮自身も騎乗だったので、縛された手首に気づきさえしなかつた、道行く人にはただの騎馬武者の一行と見紛れたであらう。

今日の道往きに美少女亀菊の男装姿はまじらなかつた。

住蓮が連れて来られたのは三条白川、最勝四天王院であつた。もちろん住蓮はこの密所がどんな機能を果たしているのかに無知だつた。

ちっぽけ祈願所にすぎなかつた四天王院に木の香も鮮々しい新殿が増築されたのは、この正月末だつたという。未だ池を掘るところにまで進捗はしていないが、それを計算に入れた床脚の高い「泉殿」である。

六間四面、檜皮葺きの方形屋根は宏大で、廂が四囲の廻廊をすっぽりとおおうている。外壁は隙間なく格子部がめぐらされ、その内側が後鳥羽院ご自慢の「障子壁」であった。

採光を充分に考えて適度な間隔を取り、巨大な襖が張りめぐらしてあるのだった。

なぜご自慢かと言えば、後鳥羽院はやがてこの「障子壁」一杯に名所絵を、障子歌を描かせる構想だった。

絵は、尊智、兼康、康俊、光時の四名がすでに選ばれていた。歌は八代歌集から藤原定家が名所を詠んだ作品を採録したり、彼自身の分を加えることを一任された。

当初は定家も楽しげにこの仕事を進めていた。ほんらいが作歌技術にかけては右に出る者がいない職人芸の定家だった。こうした「継ぎハギ」は得意中の得意である。

それがノルマの三分ノ一をこえるあたりから俄かに渋滞しはじめる。とりわけ自身の新作で苦しんだ。

理由は最勝四天王院がどんな寺であったか、その性格を知りはじめたからである。鎌倉調伏の密議、指令所であって、この「障子歌」でかこまれた泉殿では尊長僧都

を中心に日夜にわたり武家政権を呪う修法がくり返されているという。

定家の立場は必ずしも「親幕」ではなく、鎌倉武士を東夷ぐらいにしか考えない京都公卿の体質だった。他人を呪うという行為そのものは許せなかった。歌の創作自体にも不純な成分が混じりこむ。

さりとて定家には積極的に後鳥羽院政を批判する勇氣もない。悶々と独り苦しむだけだった。最後は投げやりになってしまい、後鳥羽院から「心なき歌」と冷酷に評価された凡作を提出したりする。

もちろん住蓮がその新殿中央に引き据えられたとき「障子壁」はあったが、名所絵も歌詠もない。

殆んど待つこともなく、荒々しい足取りが新殿の廻廊にひびいた。

「何だ、おぬしだったか」

住蓮の眼前に立ちはだかったのは熊谷二郎直実、蓮生房ではないか。

「……」

住蓮はほどかれた縄目のあとを撫でさすりながら微笑んだ。

その微笑には蓮生房へのなつかしさと、弥太郎判官たちの意図が何であつたかを讀んでの侮蔑とがこもこも混じり合つていたはずである。

「昔の好誼でな、弥太郎どのは真剣に専修者のゆくすえを考えてくれている」

熊谷は柄になく声をひそめ、諄々と語りだした。

いま南都、北嶺がきびしく念仏教団を責め立ててくる原因は、かつて一部の専修者たちが政治へ暴走したからである。とりわけ安樂房たちは、高階栄子や宣陽門院をそのかし後白河院の旧領奪回を策した。八条女院領や坊門家庄園群にも手を染めつつある。

庄園が侵犯されるとなれば、後鳥羽院としても放置しておくわけにはいかぬであろう。いわんや安樂房を手先にして鎌倉の北条武士がからんでくるからには、なおさらである。

「蓮西は深入りしすぎており、どうにもならないが、おぬしはむしろ立て直しに大きく役立つ。ここはわしと手を組んで、専修一門の再建に乗り出そうではないか」

弥太郎判官たちに言いくるめられたのであろう。お人好しの熊谷蓮生房は熱誠をこめて語り続ける。

「それで、当面の方策は？」

住蓮は、いつのまにか佐々木高重のかたわらへあの美少女が来て坐つたのを確認した。なぜか亀菊は視線を結ぼうとはしない。

「教団の本拠をこの新殿へ置こう。主たる念仏ひじりたちを此処へ糾合するのだ」

「それで？」

「鎌倉との絶縁を宣言する」

「どのようにしてだ」

「安樂房蓮西や西意善緯房らを獅子身中の虫として弾劾するのじゃ。朝意のもと、忠勤を励むひじり集団に変身したことを宣言する」

「北条調伏の祈願もやるのか」

視線を美少女亀菊へ移したとき、思いなしに瞬間、鋭い輝きを放った。

「当座の方便として、それやむを得ないであろう。だいたい二品の尼（政子）や武蔵太郎（北条義時）どもは、武衛公（頼朝）の恩愛を忘れ、政権を収奪し去った……」

單純素朴な熊谷は、吹きこまれたであろう反鎌倉批判を、経文でも読みくだすように並べ立ててゆく。いつも

の地声がよみがえり、蜜音が新殿いっばいに響きわたった。

「……」

住蓮は黙したまま聞いている。

「なあ住蓮、いろいろと言ひ分はあろう。わしにだってある。しかしここは大の虫を生かすためだ。耐らえねばならぬ」

亀菊ノ局や弥太郎判官、さらには尊長僧都の話では、住蓮がその人物を説得するはずだったが、いまは逆にその人物らしい熊谷蓮生房の方が説得にかかっている。

「わかる。おぬしの言うことは、よくわかる。しかし……」

「しかし、何だ？」

「お上人はどうなるんだ」

「お上人か……もちろんわしらの師弟関係は変らぬ。法然お上人は永遠に師だ」

「蓮生、お上人がだな。鎌倉を呪う祈願などおやりになると思うか」

「それは……」

「別にお上人が鎌倉北条と気脈を通じているからではな

い。あのお方にとっては、如何なる人間も平等だ。差別なしだ」

「その通り」

「かりにだな、院や御帝からひどい仕打ちに遇っても、その院や御帝のために念仏は唱えるだろう。どうぞ弥陀如来、あのお方をお救い下さいとな」

「……」

「お上人の念仏に他を呪ったり、不幸を願ったりする念仏はないはずだ。だから此処へきて、鎌倉調伏の祈願なぞあり得ないだろう」

「住蓮よ。たしかにそのとおりだ。だが、今のままだと念仏教団は潰滅してしまうぞ」

「お上人を捨てて、お上人の教えにそむいて生き残ったとて、それが何になる。専修念仏はだな、法然お上人がたったお一人で始められたものなんだぞ」

「……」

「その一人が、その教えが曲げられて、何の念仏教団か」

「うむ」

熊谷蓮生房は、顔を真紅に染めてうつむいてしまっ

た。いまこの男は、全智全能を傾けて住蓮の言葉を消化しようとしているにちがいない。

住蓮は再び視線を美少女へ投げた。

こちらは青ざめ果てて、生色は全くない。ただ不思議なことに瞳だけは涼やかな光りを失っていないかった。彼女の感性と理智とが、どこかで喰い違っているのである。

三

住蓮は胸を張った。眼前の熊谷に、と言うよりも佐々木判官や亀菊ノ局、さらには姿は現さないが何処かのものかげで耳を澄ましているにちがいない尊長僧都たち、ぶちまくったのである。

「蓮生房よ、よく聞くがよい。このたびの罪難はだな、ねらいはお上人ひとりを亡き者にしようとするところにあった。それは、わし自身が左ノ獄で取調べを受けながら身に泌みて知った。誰が策したかは言わぬ。おそらく院ご自身はそれほどかわってはいなかったであろう。

院におもねり、側近にあって主権を掌握すべく野望を逞しくした連中だ。彼らは専修念仏の信者が鎌倉武士の間にひろく潜在することを探知し、専修者の都人教化がすべて政権奪取の野望を秘めている、と院に讒した。あまつさえ専修の公卿たち、九条殿下父子、西園寺、徳大寺らの追い落しを策謀した……」

住蓮は、仲国ノ妻の妖言事件から九条良経の怪死に至る一連のデッチ上げを列挙していった。庄園群への野望はとんでもないデマであり、現に長講堂領などは次々に院の寵臣である尊長僧都や那智ノ検校長厳が収奪したではないか、と辛辣に指摘した。

敵意を鎌倉へむき出しにし、北条の手先でかつ思想上の指導者である法然を除くことによって南都北嶺の歡心も買える、という一石二鳥の妙薬をえらんだ。

「それにだな、今また念仏教団の再生をいつわって念仏武士どもを反鎌倉の麾下に結集させようとしているのだ。蓮生房よ、おぬしは権力者の手れん手くだを死ぬほど嫌って専修の門を叩いたのであるが。今さら黒衣をまとうて、またぞろ権門をくぐって往こうとするのか」「むむっ……」

「おぬしが見つめてきたお顔はただ一人。法然お上人の慈顔だけであつたらうが」

「そのとおりだ」

「お上人まで、呪いの祈願へ巻きこんで……それでも鎌倉評定所を蹴立てて飛び出した熊谷二郎直実の姿が、そっくり消えてなくなるではないか」

「住蓮、もう言うな。わしが間違っていた。わしが見つめるのは唯お一人。お上人だ。そのお上人にみちびかれてのみ拝し得る阿弥陀如来の尊顔だ」

「わかつてくれたか、蓮生房。……もう少し言わせてくれ」

「うむ」

「しかし謀略者どもは、さらに悪辣な手を使った。未だ院の宣旨が下っていないのに、念仏停止のことを謀者どもに触れまわらせた。血気にはやる西意善緯房たちは、これに挑発されて院へ押しかけた。理不尽を訴えるつもりが逆に相手側の網にかかって搦らめ捕られてしまった」

「そうじゃった。在宅していた空阿弥陀仏までもな」

「獄へ投げこんで拷問をかさね、一言でも洩らさせよう

と強制したのが、法然の下命でやった、ということだけじゃった。その一言さえ洩らせば許してやる、と甘言で釣って……だが蓮生房、これだけは忘れるなよ」

「何のことだ」

「安楽房もこの住蓮も、捕らえられて致し方のない悪事は犯している」

「どのような悪事を？」

「安楽房は仁和寺の母后、坊門ノ局と密通した。わしはな、院の愛妃とまぐわった。いずれも六時礼讃の別時会のさなかであつた」

三たび住蓮は美少女へ視線を送った。こんどはつらぬくように鋭く見た、つもりであつた。

青ざめた表情は、さっきと変化していない。ただ、さつきは生きていたあの瞳が完全に死んでいた。顔全体が水中を漂う死魚のように輪廓も不安定に、いたずらにふくらんでいるだけだった。

「わかつた住蓮。この蓮生房はな、ひとりで往くぞ。誰も頼らんぞ。たったひとりでこれからは往くぞ」

すつくと立ち上がると、熊谷は軽蔑しきつた眼で弥太郎判官を見た。

「帰るのか」

ぶざまに判官は訊いた。

「わしを搦らめ捕らえるか」

お前との約束を裏切ったという理由で。

「捕らえる理由がない」

「坂東武者の名折れぞ、弥太郎」

捨て台詞を吐いた。そして、もう一度、住蓮を振り向いた。

「安楽房はともかく、おぬしが院の愛妃と乳くくり合ったなぞ信じられんな」

そのとおりであろう。熊谷があゝの走湯山以来ずっと住蓮に追従してきたのは、シミ一つない彼の私生活に魅かれたからである。

住蓮としてもこのブライドだけは守りとおしかった。

だが今は、そんな場合ではない。

「いや、お上人がいつもおっしゃっておるではないか。

どんな人間でも煩悩には勝てぬ。わしもまた魔がさしたのよ」

「魔がさしたか」

真意を告げてしまえば、その腐心が理解できず、ただ

騒ぎだしてしまふ熊谷蓮生房であった。

「蓮生房よ、頼んだぞ。お上人のことを」

「そうか。わしは一人で往くのではなかったな。お上人の身を守るだいいじな仕事があったな」

最勝四天王院の泉殿を、ひとり立ち去ってゆく熊谷蓮生房――

彼の消息は此処で途切れる。

おそらく、やがて流罪になつて讃岐へ出発する法然を、見えず隠れに追ひ、守護していったのではなからうか。熊谷が法然の生地へ現れた伝説もこの前後の行動を裏付けるかもしれない。

熊谷蓮生房は翌年の十月二十一日、「結縁の道俗、かの東山の草庵を囲繞す、時尅に衣、袈裟を著し、礼盤に昇りて端座合掌し、高声に念仏を唱えて終りを執る。かねていささかも病氣なしと云々」〔吾妻鏡〕とあるように上品往生を遂げた。

法然の赦免の宣旨が下つたのが前年末である。この時期、法然は、摂津箕面の勝尾寺にまで帰つて来ており（入洛は未だ許されない）、あるいは熊谷はそこまで会いにいったのであろう。安心して「一人往く」の自絶往生だ

ったか。

そうは受けとめられない。

じつは法然の赦免は、その直前に営まれた最勝四天王院の落慶供養が恩赦の理由となっていたのである。新御堂泉殿の名所図絵や障子歌詠も完成し、北条調伏の祈願がいよいよ盛んになったさなかである。

四国にいた法然はともかく、熊谷蓮生房としては腹に据えかねたにちがいない。抗議のデモンストレーションとしての上品往生と解したい。

だからこそ熊谷は、この往生を関東側へ宣伝してまわったのである。

当初の予定は九月十四日で、それに間に合うように息子の小次郎直家ら家の子郎党が上洛している。十月二十一日に延期されたわけだが、その理由も注視しなければならぬ。

同じ十月十日、尼將軍北条政子が鎌倉を進発している。入洛は二十七日になってはいるが、前記小次郎の記述と符合させれば、二十一日の熊谷往生は間に合う計算となる。もしかすると北条政子も東山の草庵に立ち会ったのかもしれない。

いっそう不思議なのは北条政子が鎌倉へ帰ったのが同年十二月二十日で、熊野へ参詣したというだけでその間の行動が殆んど不明なことである。

いずれにしても鎌倉側はこの時期、すでに最勝四天王院が何を目的として再建され（旧白河殿、そこで何を祈願しているのか、知っていたはずである）。

ともあれ熊谷蓮生房は去った。

佐々木弥太郎判官は、しばらく撫然とした表情で住蓮を眺めていたが、そのまま一言も発しないで堂内から消えた。

あとは警固の武士が数人、堂隅に控えるだけで住蓮の前には亀菊ノ局しかいなかった。

「これでも未だ、わたしについてくるのかな」

住蓮は独りごちのように言った。

「ついてゆくものと、ついてゆかないものとが……」

美少女の声はかぼそかった。

(つづく)

◎読者の皆様へのお願い

弊会会員の年会費は三、〇〇〇円です。月刊誌『浄土』を細々と発行しながら、念仏信仰の増進にと努力しています。新しい読者を広くご紹介下さい。

また、この機会に、『浄土』誌と会員諸兄の皆様とのより一層の繋がりをはかるために、従来よりたびたび企画されたことでもありますが、誌面の数ページをさいて、不定期ながら随時、「読者のコーナー」を設けております。左記要領で、どうぞ振ってご投稿下さい。誌面充実のために、宜しくご協力下さいませ。

- 一、内容 自由（生活の一コマや所感あるいは思うことなどをエッセイ風におま）
- 一、枚数 四百字用紙五枚程度
- 一、締切 毎月五日

法然上人鑽仰会

「浄土」購読規定

会費一カ年 金三、〇〇〇円

（送料不要）

浄土 四十九巻 二月号

昭和十年五月二日

第三種郵便物認可

昭和五十八年一月二十五日 印刷

昭和五十八年二月一日 発行

編集人 宮林 昭彦

発行人 佐藤 密雄

印刷人 関 二三男

印刷所 長谷川印刷株式会社

東京都千代田区飯田橋一―十一―六

発行所 法然上人鑽仰会

電話東京二六二局五九四四番

〒二〇三 振替東京八一八二一八七番

田島 栄・作
高瀬精一郎・演出

法然

熊野 隆二・美術
尾上 和彦・照明
市川 正應・音楽
川村 正・舞台監督

源平の合戦とあいつぐ天災地変
無明の間をさまよう人びとを
一人も洩れなく救わんと願い
念仏を称え

せいはいっぱい生きよと
はげまし続けた法然上人

日本の大地に

万人のための仏教を確立した

大いなる宗教改革者の波瀾の生涯

法然上人お誕生八五〇年記念

前進座公演

法然上人

中村梅之助

●推薦／浄土宗

総本山知恩院

大本山増上寺

大本山金戒光明寺

大本山百万遍知恩寺

大本山清浄華院

大本山久留米善導寺

大本山鎌倉光明寺

大本山善光寺大本願

西山浄土宗

浄土宗西山禅林寺派

浄土宗西山深草派

●後援／全日本仏教会 真宗教団連合

仁平 泰彦・制作
津上 忠・同



昭和58年度公演予定

3月1日(火)→20日(日)

名古屋・栄

中日劇場

お問合せ…☎052(201)3070

名古屋市中区栄2-3-6 富久屋ビル 前進座

4月→7月

全国巡演

お問合せ…☎0422(49)2225・2633

東京都武蔵野市吉祥寺南町3-13-2 前進座